

第一二五話

平良門蜂起事付多田攻事

『前太平記』上 卷第十九 三七八頁から三八六頁より

〔良門新田城へ寄す〕

將軍・太郎平良門は、十六歳の春から奥州を発って国々を巡り、武芸修行を丹念にし身を鍛えたが、その身の怪力は、亡き父將門に劣ることはなかったの、敵う者なかったため、この地に四～五年、あの地に三～四年滞在して、その国の話を聞きその

其国の風を聞き

人たちの動向を推しはかるところ、みな朝廷の力にひれ伏し、自分の味方をしようと

其人の機を察するに、

悉く王化に服し、

我に方人すべき者

する者も一人もいなかったの、北陸山陰を經由して山陽道を越え、また九州に渡つ

一人も無かりければ、

て、さらに徒党を招いたところ、その勇ましい武力に屈服したのか、あちらこちらの悪党らが少しずつ従いついてきたところ、昨年から播磨国三石(老)の地の奥に砦を構え、楯を直し、弓を削って作り、合戦の用意の他にも余念がない。良門はよくよく考えるが、「私の父の仇である貞盛・秀郷といった者共はもう死んでいなくなつて、その者共の子供らは東国にいるというが、はるばる攻め下ろうとするならば、道中で大

道にて

変なことは多いだらう。末端の敵を討とうとして、無駄に兵力をつぎ込むよりは、一

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

大事多かるべし。

枝葉の敵を討たんとて、

徒に兵を費やさんよりは、

つの天下をひっくり返し我が物にするならば、父の供養となるだろう。まず広い目で

一天下を覆し我物とせば

父が孝養とも成るべけれ。

国々を見ると、近いところでは多田の、出家したばかりの満慶の新田城こそ、西国一の要塞である。この城を乗っ取って楯を並べて籠城するならば、きっと日本中の者共

此城を乗り取って楯籠もらば、

凡そ日本国の者共が

が集まって攻めても、簡単には落城はしない。よし、この城を攻めとりたい」と、そ

集まりて攻むる共、

輒く落つべき城に非ず。

天晴れ、是を攻め取らばや」

の作戦を練ろうとするといっても、その上一門は大きく、従者・家臣が国々に多く点在しているので、軽はずみに攻めていくのもどうであろうかと、機会をうかがっていると、弟の満政は武蔵に下り、同じく弟の満季は佐渡におり、その他主要な一族の者も皆国々に着任して、頼光・頼親だけが都に残っていらっしやったが、この時も頼親も今回の春日の行幸のお供として奉仕し、頼光朝臣は内裏守護のため、都にとどまり、多田には入道殿だけいらっしやることを、良門に報告する者がいたところ、「おお、あつらえ向きな好機である」と言って、騎馬兵二百騎あまり、歩兵は四百五

「驚破、究竟の時節なれ」

十人あまり、永延三年三月二十三日、三石を出発して、翌日の酉の剋に摂津の西宮に走り到着した。ここで人と馬を休め、明日決戦しようと思って、その夜は民家に泊まった。元々道理を踏み外した逆賊ども、兵糧の用意といって家々に乱入し、金目のものや家財は言うに及ばず、(家の人々の)明日の食事まで全て盗みとっていく。それ

朝三暮四の儲けまで悉く掠め領ず。

ゆえこの地の家臣らは、追われたように多田に参って申し上げたことは、「その名は

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL (月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>) をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

「其名字

誰とも知りませんが、数の程は七〜八百もおります者らが、村の中に乱入して、非常

誰とも存じ候はぬが、勢の程七八百も候はんが、郷中に乱れ入つて甚だ
に乱暴を働きます。急いで御兵を派遣され、御沈静していただければ、大事件と

狼藉に及び候。急ぎ御勢を遣はされ、御制止を加へられずは、御大事に及び候はん」
なりましょう」と余裕もなく急報を伝えた。しかし入道殿は、前年剃髪した頃から、
長く弓矢を手取るまいと誓って、殺生をお禁じになられるので、このようなことが
あると言っても、全く聞き入れもなさらず、ただ「適当にそれぞれ対応しなさい」と

「然るべき様に、面々相計らひ候へ」

言つて、法華三昧院 (弐) をお出にならなかつたところ、田井、大宅、仲光などが新田
城に集まって話し合うといつても、その時は兵こそいなかった。まず近辺の御家人
で、そこに到着したものを数えるとたった三百五十人あまりである。「この兵だけで

「此勢計りにては、

は、無理に打つて出ることもふさわしくない。城に待ち受けて一気に勝負を決しよ

愁に打つて出でん事も然るべからず。

要害に待ち受けて一時に勝負を決すべし」

う」と藤原仲光が諸軍に命じ、敵が来るのを待ち受けた。

【新田城の攻防】

夜があけると二十五日の、まだ辰の剋ほどに、平良門はその軍勢七百騎余りで、新
田城に押し寄せて、鬨の声を三度あげるまで城中は沈黙を保っていたのだった。良門
は真っ先に馬上に座りながら、大声で名乗ったことには、「桓武天皇の正式な血筋で

「桓武天皇の正統、

ある平将門親王の一子、將軍太郎良門が、亡き父の供養のため義兵を募り出兵して、

平親王将門が一子、 將軍太郎平良門、 亡父孝養の為一挙の義兵を起こして、
まず手始めにこの城に押し寄せ、満仲の首を見たいと思い、今朝からやって来たが、

先づ手合わせに此城に押し寄せ、 新発意の首を見ばやと思ひ、 今朝より寄せたるに、
関も合わせず（自分を）当てようとする矢も射ないのは、逃げたのか、それとも怖気

関をも合はせず、当の矢をも射出さざるは、 落ち失せたるか、 臆したるか。
づいたのか。あれほど名を天下にとどろかせなざる入道の、このような戦の作法を行

さしも名を天下に顕はし給ふ入道の、 斯かる軍の作法こそ意得ね。
うのは理解できない。すぐに木戸を開いて、決着をつけなさい。もつとも、亡き父の

急ぎ木戸を開いて、 雌雄を決し給へ。 但し、 亡父
親王将門は力が弓の実力によって、世間に噂されなさると聞く。父であってもどれほ

親王は力量弓勢を以て 世に知られ給ふと聞く。 父ながらも何計りの事なるか、
どのことであるか。その力量を私は知らない。幸い満仲公は存命でいらっしゃるの

其程を知らず。 幸い新発意存命して坐すれば
で、きっと覚えていらっしゃりそうなので、矢を一本受けて、その（父との）差を感

定めて覚へ給ふらんれば、 矢一つ受けて 其優劣を知り給へ」
じてください」と言うままに、身支度をして矢をさっとつがえ、少し弓を引き絞りた

めているその有様は、確かに一騎当千の様相と見えたのだった。紺地の錦の鎧直垂

(参)に、金白檀(肆)の鎧を着て、兜の大立物(伍)には日月を金銀であしらった五枚兜

(陸)の緒を締め、金で装飾した大太刀を二振り腰に佩いて、栗毛で三寸以上に見えた

馬に、白く磨かれた銀覆輪(漆)の鞍を置いて、側黒の弓(捌)に十四束三伏(玖)の矢は、

沓卷(拾)を過ぎたところまで引き、弦音を高く鳴らせて射た。その矢は城門の高櫓の

狭間 (拾巻) の板を射抜いて、背後の柱に揺れて突き刺さった様は、身の毛もよだって、
どんな不運な者が、この矢に当たって命を落とすのだろうか、(恐怖で) 舌を震わ
せた人も多いとか言う。藤原仲光が高櫓に上ってこの時の様を見ると、父将門とは身
長ははるかに劣って、五尺八九寸もあろうか、顔は赤く目は逆向きに裂けて、鬚が長
く茂るように生えて、鎧を着下し、馬上での身なりは、父の将門に少しでも違うとこ
ろはなく、このような大事件を決心したのも当然と思える雰囲気である。仲光が申し
上げたことは、「大げさな振舞い、どんな人がやってきたかと不思議に思ったが、

「異々しき挙動、 何なる人の寄せたるぞと心憎く思ひしに、

以前死んだ将門の子であるとか。この数年西の国々にいて、その土地の者や百姓た

前亡将門が子なるとや。 此年来西国に在つて、 土民百姓等を劫かし

ちをおびやかし乱暴を働くことは、お上にまで届くといっても、朝廷の御慈悲で少

狼藉に及ぶ由、 上聞に達すと雖も、 公の御恵みを以て少且く

しの間討伐を後回しにしているところで、恩を知らず身の程を知らず、この国をひっ

刑を措かるゝのところに、 恩を知らず身を忘れて、

くり返そうと計画するとか。どうしてそのようなことがあるだろうか。天誅を待つこ

天下を覆さんと謀るとや。 何条さる事の有るべきぞ。 天誅を待たずして

となく、自滅を招くことになる。大体この国土の中において主命に背き、その罪はどこ

自滅を招く。 凡そ四維の中に在つて王命を背き、 其罪

に逃れるところがあるだろうか。どうだ、こちらの若者どもは。近年天下の内がな

豈逃るゝ所有らんや。 何に味方の若者共。 頃年四海

んの騒ぎもなくて、まったく戦の事を忘れてしまったように見える。普段より準備

穏やかにして、 更に軍用を忘れたるに似たり。 日来貯へ儲けたる

している鑓や太刀の刃を少しばかり（実戦で）試してみて、天下の大事件がある時の

鑓、太刀の刃、少々試みて、

天下の御大事あらん時の

為の稽古にきなさい」と呼びかけた。血気盛んな若者七十人余りが、二枚の城門を

稽古にせよや」

さっと開いて叫んで駆けていく。良門の先陣の二百騎あまりは一気に取り囲まれるように追い立てられ、東の山すそへ退陣する。二陣の兵の、三百騎余りと入れ替わり、そうして険しい坂の中を、追い追われながら上り下りし、日が変わるまで戦った。双方戦い疲れたと思われたので、互いに新しい兵を入れ替えて、終日戦い続けた。攻め寄せる軍勢は、元々城中に兵がいなくて聞いていたので、ただ揉み合って落城させようと、考えて侮ってやってきたので、考えと違って味方と違って味方も多く討たれたので、良門の思うことは、「この城を落とすのにもし日をまたげば、都から応援が来

「此城若し時日移さば、

京都より後攻して

てこちら側が勝つことはないだろう。急いで手立てを考えて攻め落とそう」と考え

味方の勝利有るべからず。

急に方便を以て攻め落とすべし」

て、前方には雑兵を二百人余り残し、篝火をあちらこちらに焚かせ、主要の者たちは、こっそり城の東の平居峠^(拾貳)の谷間の道もないような場所を、夜中に気付かれないように通って、背後から攻め寄せ、新田村^(拾參)から火をかけて、焼き討ちにしようと企てた。城中でもこれを察して、前方には頼りにならない歩兵の七八十人に、射手が少しばかり加わって高櫓の陰で、出堀^(拾肆)の中から時々遠く射させ、主要な兵たちは皆後方に回って、敵が火をかけると、横から駆けこんで、状況の分からない敵共を、ここの行き止まり、あそこの行き止まり、あの難所に追い詰めて、捕えようと待

ち受けた。

[頼光軍勢を率いて多田へ馳す]

このような状況であったが、主上（一条帝）は二十三日に行幸になって、一日中幣帛を捧げ、催馬楽（拾伍）を奏で、二十四日は東大寺（拾陸）・興福寺（拾漆）の二つの寺院にお出ましになられ、ここにある諸堂をお巡りの後に、長年人目に触れなかった伝来の秘宝を残らず御覧になって、二十五日は一日ご滞在になられて、明日お帰りになるはずの予定できめられていたところに、摂州多田に事件があった旨、その情報があったので、蔵人頭は摂政の命を受けて、お供に随行していた源頼親もお呼びして仰って伝えられたことは、「さて多田の満仲が、敵に囲まれるという情報、きっと兵もいない

「抑多田の新発意、 敵の為に囲まるゝの由、 定めて無勢ならんか。

のではないのだろうか。もしあの城が攻め落とされたならば、賊徒は都に攻め上り、

若し彼城攻め破られなば、 凶徒都に攻め上り

大事件に成るだろうか。頼光は内裏を守っていると言っても、多田の城が後ろから攻

大事に及ばんか。 頼光は大内の守護たりと雖も、 多田後攻の為、

められているため、内裏の門番を免除されている間に、急いで赴き下って、多田を救

鳳闕の勤番を許さるゝの間、 急ぎ罷り下つて 之を

いに行くべき旨を申し遣わそう」と仰った。頼親は、非常に喜んで、すぐに早馬を向

救うべきの旨、 申し遣はすべし」

かわせて兄頼光朝臣にこのように申し派遣された。頼光朝臣は多田の様子を耳にす

ると言っても、内裏の門番として天子の不在を守っておられたので、力及ばず手を拱

大内の守護として空位を守つて坐しければ、 力及ばず手足を搔ひて

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵／<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

いて座っていたところに、この使者が到着して、弁官 (拾捌) からの下文と、並びに弟

坐せし処に、

頼親の書状を差し出したところ大変喜び、武器となるものも仕度しきれず、その場に居合わす兵四百五十騎と、二十六日のまだ寅の剋に都を出て、鑑 (拾玖) を鞭で打っては同日の辰の剋に摂州江口 (廿) に到着し、ここで一度休憩して多田の様子を聞いて、すぐに兵を手分けして三手に分かれて向かわれた。

[良門敗走]

そうしているところに平良門は、計画が漏れていることを知らず、合図の時間になったとあって、新田村の民家二十箇所あまりに火をかけて、喚き叫んで攻め上がる。新田村の人々は、少し前から妻子老人は皆赤松 (廿壹) のあたりへ逃がしておいて、男だけはそれぞれ城中にこもり居座っていたので、火がつけられたとしても慌てて騒ぐ者もなく、猛火はだんだんと強くなるが、風が北西から吹いてきて、城は風上であり、残る煙りは攻め寄せる軍勢の方に香り吹いたので、火に遮られて進めず、楯の板

楯の板などを以て

などで扇いで防ごうとするほどで、戦陣の様子はばらばらになったように見えたが、

扇ぎ遣らんとする程に、

陣の立て様取次に成りて見へし処を、

夜から待ち準備していた城中の兵二百騎あまりが、西の藪陰から鬨の声をどっと投げかけ、猛火の下を走り回って、顔も振ることなく戦った。元々長年ここを知っている者たちであるので、ここに隠れあそこから現れ斬って回ったところ、兵たちはすぐに崩れて我先にと逃げまどう。良門ははやり立つ気持ちと言っても、落ち延びる兵に

付いて行って、昆陽野 (廿貳) まで退いたのだった。(村人は) 城中からそう遠くまで追
わなかったのので、(良門の軍で) 討たれた者は少なかったが、皆弓矢を捨て、馬も逃
げてあきれ果てた有様である。

【良門再び勢を集めて反撃す】

このようだったところに、近国の野盗や山賊がこのことを聞き及んで、討死したも

斯かりける処に、 近国の野伏山賊此事を聞き及びて、 討たれたる者の
の鎧や兜を剥ぎ取ろうとしてあちらこちらから集まって、山や宿中にいっぱい

物の具剥がんとて 此彼より集まりて、
なったが、良門が使者を立てて欺いたことには、「そもそも良門は、長年の間念願が

「抑良門、 年来の宿意あるに依つて、
あるために、このような戦に及ぶ状況で、味方が少ない間に、不本意にも敗北した。

斯く鬭諍に及ぶの処に、 味方無勢の間、 意ならず敗北しぬ。
まだ念願を達成せず無常にも自決するようなことは、実に残念な顛末である。願わく

未だ本懐を遂げず空しく自殺せん事、 誠に口惜しき次第なり。 願はくは
ば皆さんの強い力を借りて、もう一度戦うならば、多田の城を攻め落とすことは掌を

旁々の武力を借つて 今一戦に及ばず、 多田を攻め落とさん事掌を
指さすよう (に簡単なこと) だ。私が本来の目的を遂げるならば、皆さんもあの城中

指すが如し。 我本意を得ば、 旁々も彼城中に
に集められた金銀財宝を皆に配るならば、多すぎる利益であろうがそうすれば皆さ

貯ふる処の金銀財宝、皆之を配分せば、 過分の所得たるべきが、然れば面々も
んも利益を被り、良門も望みを達成することができよう」と言葉の限り頼んだとこ

所得付き、

良門も所存達せん」

ろ、貪欲な心を中心とする盗賊らの中でも、特に播磨国の連中は、近頃の良門の武勇

欲心を宗とする盗賊等の中にも、

をよく知っていたので、「なるほど、若連中の腕試しに良門に指図させて、大勢で攻

「実にも

若者共が腕試しに、

良門に下知させて

大勢にて

めたとして、どうして攻め落とさないということがあるはずない。さあ城をこの折に

攻めたらんに、

やはか攻め落とさずと云ふ事あるべからず。

倡事次に

攻め破って、財宝や重宝を奪い取ろう」と、三百人余りが一番に駆け軍勢に加わった

攻め破って、

金銀重宝奪いとらん」

ので、これを和泉・紀伊・大和・河内・摂津国は言うに及ばず、山城・丹波の連中ま

で、我も我もと従属してきたほどで、ほんの少しの間で千三百人にもなってしまっ

た。良門はたいそう喜び、すぐにこの兵を二手に分けて、一手は横山^(廿参)から向か

わせ、二手は萩原^(廿肆)から攻め寄せようと準備して、軍を分け陣を立ててあちらこ

ちらへするところで、頼光朝臣の先陣の酒田公時が百五十騎を率いて馬煙を上げて

やってきた。良門はこれを見て、幸いここはお詔え向きな駆け場であると言って、す

幸い此は究竟の駆場なれとて、

ぐに戦陣を立て直し、物陰に籠もって待ち受けた。公時は、百五十騎を一箇所に置い

廳て軍を立て直し、

陰に閉ぢて待ち懸けたり。

て、良門の一陣の三百五十騎が(公時の陣の中に)駆けこんで、遮二無二切って回る。

無二無三に気つて廻る。

源氏の二陣のト部季武は、昆陽の池^(廿伍)の裏の端で、敵の四百騎あまりと対峙させ、

深田の畔の細道を追い駆け追い返され、火花を散らして戦った。三陣の碓井貞光は、

味方の百騎で、敵の二百五十騎を相手として、尼崎の北在家 (廿陸) を、東西へ追い倒し、南北に駆け散らして、正面だけを見て戦うので、どの勢力も隙があるとも見えな

面も振らず戦へば、

何れ隙ありとも見へざりけり。

かった。

[綱、多田へ馳せ参す]

この時よりもよって渡部綱は、代参として日吉に詣で、三日お参りして、撫物 (廿漆) やお守りなどを手にして、二十六日の未明に下山しようとして、東坂本 (廿捌) までまだたどり着いていないところに、肌背馬 (廿玖) に鞭を打って、(誰かが) 駆けてきた。

綱は怪しみよく見ると、その者は馬から飛び降り、「このようなことで、左馬権頭殿

「云々の事にて、

頭殿は

は早ければこの明方から御出陣します。急いでお下りいたしませとの事でございます

早此暁より御出陣候。

急ぎ御下り候への御事にて候」

す」と、息も継ぎきれず申し上げた。綱は聞いて、「それでは事態は急ぐことである

「さては事急なり。

な。ここからすぐに木幡 (参拾) 越えに懸って下ろう。この御撫物は貴方が都に持ち帰

是より直ぐに木幡越へに懸かつて下るべし。

此御撫物は汝持ちて都に帰り、

って、武器や馬をそれぞれ用意して向かうのだ。山崎 (参拾壹) の辺りで待つべきであ

物の具、乗り替へ、其々も認めて出で向かふべし。

山崎辺にて待つべきなり」

る」と言い含め、坂本からすぐに多田へ駆けて行ったのだった。

[良門頼光に迫る]

そうして昆陽ではまだ戦の最中で、四か所に集まって同時に戦っている中で、大将の頼光朝臣は良門の四百騎余りと味方二百五十騎をぶつけて、その日の午の下刻から申の剋の終わりまで、呼吸を整えるひまなく戦ったが、全く勝負がつかなく、ところ、良門が自分の力を過信して徒歩の様相になり、頼光朝臣と直接勝負をして決着をつけようとして、八尺ほどの鉄の棒を、稲妻のようにひらめかせて、大将頼光と接近するように駆け寄って、あわやここまでと見えるところで、元々頼光は矢継ぎ早の達人、矢を取り引いて射なさったが、良門は他とない早業で、ある矢はくぐり、ある

或いはくぐり、

矢は飛び越え、左手でねじ伏せ、右手でかき開いて、隙があれば押し伏せて、組み合

或いは踊り越へ、 弓手に振り 馬手に開ひて、 間あらば押し並べて

おうとしていたのだった。本当にめったにない見物である。

組まんとぞ仕たりける。

[綱良門を討取る]

こうしていたところに渡部綱が、従者と合わせて二十八騎で揉み合いながら走っ

斯かりける処に渡部綱、 主従二十八騎にて揉みに揉みで走せ来たり、

て来て、この様子を見て、三尺二寸の太刀を正面に掲げて、走り隔たって進んできた。

此体を見て、 三尺二寸の太刀真つ向に指しかざして、 駆け隔たりてぞ進みける。

良門は少し見て、「お前は誰だ」。「渡部源次綱」と名乗る。「さては敵に不足ない」と、

良門打ち見て、 「御辺は誰そ」。「渡部源次綱」と名乗る。「さては敵に不足なし」と、

例の鉄の棒を引き寄せ、渡部の乗る馬の四本の足を薙ぎ倒そうと近づくが、綱が片手

件の棒を引きそばめ、綱片手
渡部が乗る馬の諸膝雍がんと近付くを、
で太刀の切っ先が良門の兜の吹き返し (参拾貳) を掠めて、面頬 (参拾参) の端を切り下げ

打ちに打つたる太刀の鋒、面頬の端を切り下げたり。
良門が甲の吹返をかすりて、
た。渡部は馬から飛び降り、太刀を投げ捨てむんずと組み合う。両者ともに評判の怪
力で、半時 (参拾肆) ほど揉み合ったが、鎧の袖も草摺り (参拾伍) も全て引きちぎり、兜も
落ちてざんばら髪になり、足場は穿たれて畔の片側から共に転げ落ちて、また上にな
り下になって組み合ったが、良門は先ほど頼光が打ちなさる矢を避けて、綿嚙 (参拾陸)

綿齧のはづれより、
の端から、左手の肩先を深くに射られ（ており）、その矢は抜いて捨てたのだが、鏃

鏃尚
弓手の肩先を篋深に射られ、其矢を抜いて捨てたれ共、
が依然として体に残っており、非常に痛んでいたところ、さらに渡部に斬り付けられ

鏃尚
又渡部に切り付けられたる
肉中に残つて 甚だ痛みけるに、
た頬の傷から流れる血が目に入っていたので、自然と気力が弱り力も落ちて、とうと

終に
頬先の疵より流るゝ血、眼に入りたりければ、自づから精弱り力落ちて、
う下に組み伏せられてしまった。渡部は上に押し掛かり、髻を取って首を搔きとり、

下にぞ成りにける。

「平良門討ち取ったり」と叫んだところ、味方の兵が一斉に勝鬨をどっと上げたのだ
った。その他の賊徒等は良門が討たれたと見て、ひたすらに我先にと逃げて行き、一
人も留まって討ち死にする者もなく、逃げる際の傷をたった五か所三か所だけを身
に受けない者もいなかった。さて、今回の戦功は実に二つとないものと言っても、私

私的たる由に成りて、
用の敵であることになって、勸賞 (参拾漆) は行わなかったが、その時に合わせてその功

績に寄せて、色々な引出物を下さったのだった。

様々の引出物をぞ賜びにける。

注釈

- ※壺・播磨国三石……「三石」の地名は現兵庫県神戸市兵庫区の和田岬駅近くの「三石通り」や「三石神社」がある。しかし、神戸市の播磨国の範囲は北区一部と須磨区・西区・垂水区で、神戸市兵庫区は摂津国である。地図上では兵庫区と播磨国範囲は離れていないが、この現存する「三石」の地名が、作中の「三石」であるとは断言できない。下地図①にはこちらの「三石」を仮にマッピングした。
- ※貳・法華三昧院……現在の川西市多田神社。鷹尾山法華三昧寺多田院と呼ばれた。下地図①②を参照。
- ※参・鎧直垂……直垂は衣服の一つ。鎧直垂は鎧の下に着る直垂。
- ※肆・金白檀……金箔や金泥の上に透漆を薄くぬったもの。
- ※伍・大立物……「立物」は兜の鉢（頭の上部分を覆う部分）の装飾としてつけるもの。「大立物」はそれが特に大きなもの。
- ※陸・五枚兜……五段下がりの鍬（兜の鉢の左右と後ろに垂れて首の部分を覆うもの）のある兜。
- ※漆・銀覆輪……覆輪は刀のつば・鞍・器などのへりを金属などで覆い飾ったもの。「銀覆輪」はそれが銀で装飾されたもの。
- ※捌・側黒の弓……外竹（弓の外側の竹）と内竹（内側の竹）を塗らずに、側木（外竹と内竹の間に挟んだ木）だけを黒く塗った弓。
- ※玖・十四束三伏……「伏」は指一本分の幅。四伏で一束。つまり、指59本分の長さを表す。
- ※拾・沓巻……矢筈（矢の幹）の先端に鎌を差し込んで糸を巻き付けた部分。
- ※拾壺・狭間……城壁や櫓に設けられた小窓。外を伺ったり、矢や石を放つためのもの。
- ※拾貳・平居峠……現兵庫県川西市西多田平井田筋のあたりか。下地図①②を参照。
- ※拾参・新田村……現兵庫県川西市新田のあたりか。下地図①②を参照。
- ※拾肆・出堀……外部に突き出た城郭の堀の一部。物見や上から矢を射たりするためのもの。
- ※拾伍・催馬楽……古代の歌謡の一つ。
- ※拾陸・東大寺……現奈良県奈良市の華嚴宗総本山。南都七大寺の一つ。下地図①を参照。
- ※拾漆・興福寺……現奈良市の法相宗大本山。南都七大寺の一つ。藤原氏の氏寺で、春日神社を管理した。下地図①を参照。
- ※拾捌・弁官……太政官（中央の八省、諸司や諸国を総括して国政を治めた行政の最高機関）に属する官名。
- ※拾玖・鐙……馬具。鞍から垂らして足を踏みかける。
- ※廿・摂州江口……現大阪市東淀川区南江口のあたりか。下地図①を参照。
- ※廿壺・赤松……現兵庫県川西市赤松のあたりか。下地図①②を参照。
- ※廿貳・毘陽野……現兵庫県伊丹市北部のあたりか。下地図①②を参照。
- ※廿参・横山……現兵庫県川西東多田に「横山」の小字が見られる。下地図①②を参照。

※廿肆・萩原……現兵庫県川西市萩原のあたりか。下地図①②を参照。

※廿伍・昆陽の池……現兵庫県伊丹市北部の昆陽池公園のあたりと思える。昆陽池は奈良時代に行基が築造した灌漑用の溜池。下地図①②を参照。

※廿陸・尼崎の北在家……現在兵庫県尼崎市には「中在家」の地名はあるが、「北在家」の地名はない。「北在家」の地名は加古川市にあるが、尼崎からは遠い。前者尼崎市の中在家北を指しているのだろうか。下地図①②を参照。

※廿漆・撫物……祓の際に穢れや災いを移し負わせるもの。紙の人形や小袖の類を用いる。それで体を撫でて水に流すことで穢れを祓う。

※廿捌・東坂本……比叡山の東山麓一帯。下地図①を参照。

※廿玖・肌背馬……鞍を置かない馬。

※参拾・木幡……京都府宇治市木幡のあたりか。下地図①を参照。

※参拾壹・山崎……京都府乙訓郡大山崎町のあたりか。下地図①を参照。

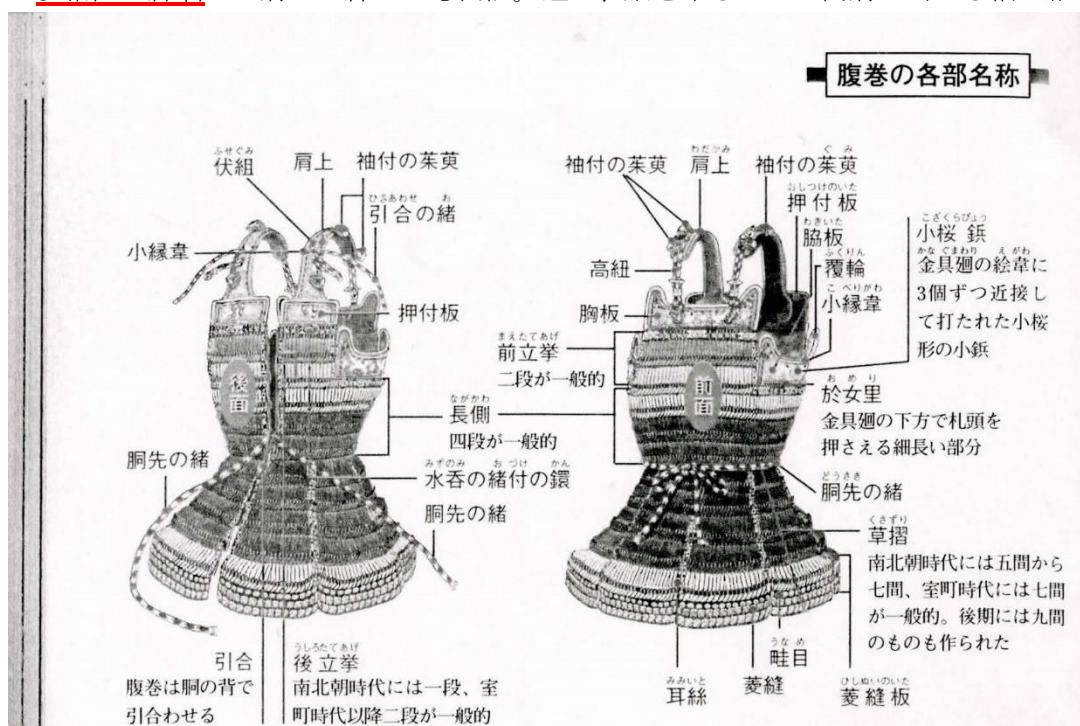
※参拾貳・吹き返し……兜の鍔の両端を左右にひねり返した部分。

※参拾参・面頬……顔面を防御する武具の総称。

※参拾肆・半時……約一時間。

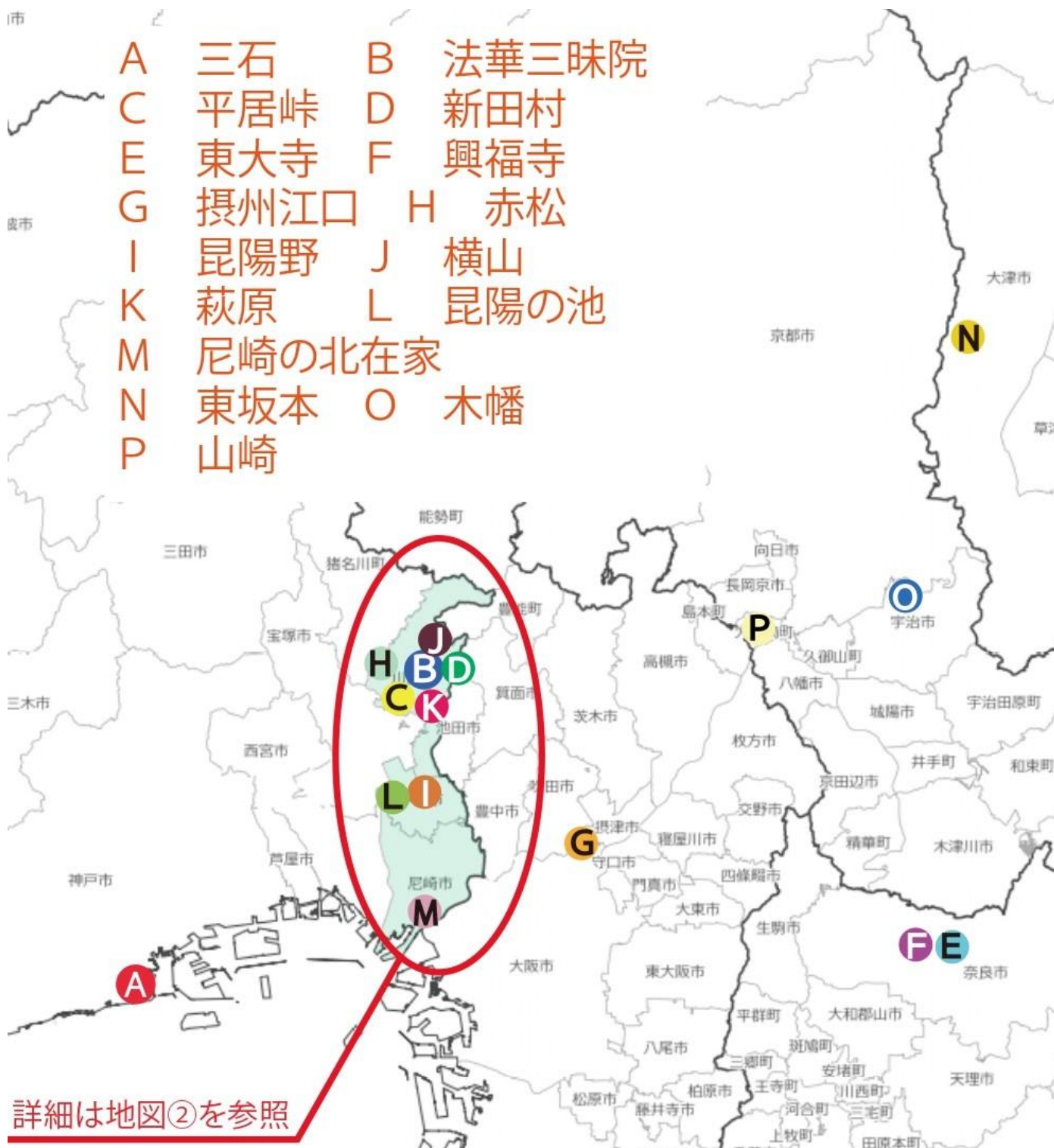
※参拾伍・草摺り……鎧の胴の裾に垂らして腰から下を覆う部分。

※参拾陸・綿嚙……肩・綿上とも表記。鎧の、胴を吊るために両肩に当てる幅の細い所。下図を参照。



※参拾伍・勳賞……官位や褒美を授けること。

<地図① 登場地名全体図>



<地図② 川西・伊丹・尼崎拡大図>



新サイトになり、約2年ぶりの更新…本当にお待たせして申し訳ありません…やりたいことが増え、やるべきことも増え、ちょっとした葛藤も抱え、本作に割く時間を作れずにいました。

やるべきことがようやく落ち着き、前太平記の作業を再開することができました。これからは前太平記に時間をさけることも多くなると思うので、自分のそれなりの信念を大事にして、前太平記に向き合っていきたいと思います。

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzen taiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

実現可能かは分かりませんが、秋ごろまでに頼光関連のお話は完訳を目指しています。本年は源頼光公没後一千年の記念の年です。彼という人の魂を私なりの遣り方で慰められればという思いで頑張りたいと思います。

さて、本話についてですが……綱がまるでヒーローのようですね。橋姫の事件の時のことを思い遣ると、きっと彼にとってはその時よりも誇らしい出来事なのではないでしょうか、この良門の首をとるということは。私は橋姫の事件を綱にとっては「恥じ」だと思っています。悪鬼に騙されて取り逃がしたのですから。ですが、本話の綱の功績は頼光を救ってのもの。同じ血まみれの思い出でも、こちらの方が彼にとって誇らしいものではないのでしょうか。

昨今綱が注目されていますが、未だ良門との対決は有名ではないので、この訳でこの二人の関係の厚みが知られるものになってほしいなと思っています。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m(__)m

公開：2021/5/26

海熊童子